

## 新しい学際研究 **ポスト・コロナ学** パンデミックと社会の変化・連続性、そして未来

2020年5月筑波大学で開始された「**新型コロナウイルス緊急対策のための大学『知』活用プログラム**」は、研究成果の社会還元を通してコロナ禍による危機的状況の解消を目指しています。ウイルス学、医学、数理科学、情報学、教育学、社会心理学、法学、経済学、芸術学などの分野から27プロジェクトが採り上げられています。研究者を対象としたワークショップなどにより、専門分野を超えて活動しています。これら多様な研究を社会に広く提供するため、『**ポスト・コロナ学**』\*(秋山肇 編 2022年4月)として上梓しました。

※ <https://www.akashi.co.jp/book/b603917.html>

構成は、I.新型コロナと公衆衛生・社会、II.新型コロナと福祉・教育、III.新型コロナと日本、世界、IV.新型コロナと芸術、V.新型コロナとポスト・コロナ学からなり、いくつかの研究領域にまたがっている学際性に特徴があります。

編者は、コロナ禍によって変わったこと〔変化〕、変わらなかったこと〔連続性〕の両方を見つめることで、新型コロナウイルスが社会に与えた影響の全体像を明らかにすることができ、その後の社会を構想することができるとしています。

### 星野 源 うちで踊ろう

「IV.新型コロナと芸術」の「9.ディスタンス・アートの創作手法分析」では、コロナ禍が芸術分野の制作環境、受容環境が大きく変容させたことを取り上げています。「ディスタンス・アート」とは、「ディスタンスと関係するアートやフィクション」と広く定義し、その新しい文化的価値を探ります。

様々な形式がありますが、ネット上で展開するものの特徴は、①画面分割や複数画面、②PC画面や通話を見せる、③映像をつないでいく、④WEBカメラ内での表現、⑤自宅の使用の5つがあります。

ディスタンス・アートの鑑賞にも変化ができており、双方向性が重要となっています。とくに他人が公開した動画に対し、自分の動画を横に並べるように編集し、「自らの作品を重ね」てセッションを楽しむものとして、シンガーソングライターで俳優の星野源さんによるYoutube動画は大きな話題になったことを取り上げています。

### ディスタンス・アートの未来

災害や危機が発生すると、従来のようにアートが作れなくなる可能性があることが、今回のコロナ禍ではっきりしました。編者は、「どのようなアートが有りうるのかを先に考えておくことは、文

化を生き延びさせる上で重要」と述べています。

facebookの公開グループ《**ポストコロナの合唱活動を考えよう**》(管理者：千葉敏行氏)でも、従来の形での合唱活動がコロナ禍でどのように変容するのか、その後の合唱はどうあるべきか、さまざまな角度からの提案や指摘がなされています。これは『ポスト・コロナ学』の立場と軌を一にしています。

### 世界と日本の文化政策のちがい

「10.COVID-19下の創造性と芸術表現」では、UNESCOなど海外の文化芸術セクターの対応策を比較しています。

日本の場合、文化庁における「文化」の定義は極めて広く設定されており、「中央主導型と民間・地方主導双方に特徴づけられる戦後の日本の文化行政は、1990年代に至るまで、長らく民間との距離を取ってきた。そのため、文化庁における文化創造経済の位置づけも明確でなく、また、文化庁は交易に係るもののみを対象とせざるを得ない事情もあり、政策として概観する限りにおいては依然として公・民の隔たりは大きい。」と述べています。

文化庁では、2020年7月主要国の文化芸術支援策を比較参照し、団体および個人に対する給付金を支給していますが、果たしてどれだけの効果があったのか気になるところです。文化芸術推進フォーラムの報告(2021年2~5月)によれば、コロナ禍の影響度(損失)は、パフォーミングアーツ部門：劇場70%、オペラ53%、劇団50%、平均で58%、音楽部門：ポピュラー79%、クラシック：55%、平均67%と大きな損失が見られます。

また、同フォーラムの文化芸術分野の契約に関するアンケート調査では、「メールのやり取りや電話・対面での口頭のやり取りに基づき業務を受けている」62.8%、「業務委託契約書や支払い調書、あるいは業務依頼書等の文書のやり取りをしている」37.1%となっています。依頼・雇用主からの報酬や仕事内容の明示や支払い遅延、一方的変更等において、かなり弱い立場に置かれているのが現実のようです。

さらに、収入が50%以上減少した割合は、個人全体で約7割、団体全体で約8割です。個人では伝統芸能81.9%、大衆芸能79.5%、音楽73%などとなっています。厳しい状況であることがわかります。

『ポスト・コロナ学』は、「2020年以降の世界的な新型コロナウイルス感染拡大による社会の変化と連続性を明らかにし、新たな社会のあり方や学問の役割を構想する学問」と定義され、前述のコロナ禍によって変わったこと〔変化〕、変わらなかったこと〔連続性〕を知ることで、ポスト・コロナ社会のあり方が構想されていくことを期待しています。

これは、われわれ音楽・合唱関係者にとっても重要な課題です。今後の活動に注視しましょう。